

小學國語讀本

尋常科用

卷十

文部省



第十 稻むらの火

「これはたゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛ごへゑは家から出て来た。今の地震は別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したこと

ない無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取られて、さつきの地震には一向氣がつかないものやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸附けられてしまつた。風とは反對に波が沖へくくと動いて、見るく海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現れて來た。

「大變だ。津波つなみがやつて來るに違ひない。」と、五兵衛

は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみによられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで家にかけて込んだ五兵衛は、大きな松明たいまつを持つて飛出して来た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」と五兵衛はいきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ

薄 没



又一つ、五兵衛は夢中^{むちゆう}で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つた

まゝ、沖の方を眺めてみた。

日はすでに没して、あたりがだんく／＼薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘^{はやかね}をつき出した。

「火事だ。莊屋^{しやうや}さんの家だ。」

と、村の若い者は急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目には、それが蟻ありの歩みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて來た。彼等は、すぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつつちやつておけ。——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人々は、追々集つて來た。五兵衛は、後から後

から上つて来る老幼男女を一人々々數へた。集つて来た人々はもえてゐる稻むらと五兵衛の顔とを、代るぐく見くらべた。

其の時、五兵衛はカーぱいの聲で叫んだ。

「見る。やつて来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見るく太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて来た。

「津波だ。」

と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかゝつて来たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきを以て、陸にぶつかつた。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のやうに山手へ突進して来た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分等



の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高臺ではしばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波にふぐり取られてあとかたもなくなつた村をたゞあきれて見下してゐた。

稻むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまま、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。